

第十三回OBサミットにおける福田名誉議長の演説

議長、御臨席の皆様

先ず最初に、インターアクション・カウンシルの第十三回総会をここ東京で開催することを快諾下さり、遠路はるばるご参加下さいました皆様に、心から御礼申し上げます。また、今回はじめて日本からご参加くださいました、竹下、宮沢両氏を歓迎いたします。

今回の東京会議開催にあたって、関係者は非常に神経を使いました。と申しますのも、皆様ご存知のとおり日本では年初から予想を越えた事件が続いたからです。特に、地下鉄サリン事件は日本だけでなく、他の国々にもすくなくからぬ衝撃を与えました。このような無差別テロは、人々を恐怖に陥れ、世界の平和と民主主義に対する脅威となっています。とりわけ、大量殺りく兵器をつくりうる物質が国境を越えて流通していることを危惧しています。

われわれは、このようなテロリズムに断固たる決意をもって対処しなければなりません。特に国際的な広がりを見せる無法な破壊活動に対して、国際社会全体が協同して、迅速かつ有効な対応策を確立する必要があります。皆様のご協力をお願いする次第です。

さて世界は、百年ごとに巡ってくる大きな節目を、もうすぐ迎えます。私は二十世紀の初頭に生をうけ、その歴史の流れに否応なしに巻き込まれて、政治・軍事・経済・科学技術・文化のすべての局面を体験してきました。いわば、この世紀の生き証人のひとりに属するものです。その年月を振り返っての感慨をひとことに括りますと、「栄光と悔恨の二十世紀」と申したい思いにかられるのであります。

二十世紀において、じゅんるいは史上最大規模の流血を、経験しました。そのような、最も血にまみれた百年ではありましたが、同時に、大変な発展の期間でもありました。新エネルギーの開発、科学技術の進歩と相まって、物質文化、すなわち人間の物質的側面に、大変革が起きたのです。これは、特に経済発展において顕著で、世界のGNPは、実に十五倍の大発展を遂げました。人類が経済を、これほど短期間に、これほど拡大させたことは過去にその例をみないのであります。

これはすなわち、大量消費社会の出現でした。このため、先進工業国の多くの人々の暮らしは、飛躍的に向上しました。しかし、実際にはそれは、「作りましょう、使いましょう、捨てましょう」の過剰消費だったのです。しかし、私たちは、何の不安も感じず、それが当たり前だと考えて、今日まで来てしまったのです。しかも一方には、こうした発展と開発から大きく取り残されてしまった、十数億人もの人々がいる現実が、重くのしかかっております。まことに「栄光と悔恨の世紀」だったのです。

あの第二次世界大戦終結から五十年、そしてあと五年ほどで、私たちは次の二十世紀に入ります。しかし、率直なところ、私の抱く展望は、悲観的といってもよいほど、きわめて深刻な内容になる可能性があります。これまで、地球上のほとんどのものと生命を浪費してきたツケを、払わなくてはならないからです。

このまま何の手も打たずに推移すると、人類の生存すら危ぶまれる事態になるでしょう。私達は今や、人類の存亡がかかる重大な変わり目として、二十一世紀を考えなければなりません。その根幹となる課題は、今後の安全保障の概念に食糧、資源、エネルギー、環境といった側面を備えたものにしなければならぬ、ということにあります。

幸い最近、いま申し述べた「二十一世紀の危険な徴候」への理解が、広がってきました。なかんずく最も危険な要因は、世界人口の問題であります。「人口爆発」という言葉が生まれて、かなりたちましたが、その経緯を、私の人生の節目とつきあわせてみますと、誠に驚くべき変化をみることができます。

私が生まれた一九〇五年の世界人口は、約一七億人でした。これが二〇億人に達するまで二五年かかり、私はすでに大蔵省に勤務しておりました。そして私が大蔵省を辞めた一九五〇年に、やっと二五億人でした。ところが、私が総理大臣となった、一九六七年には、四十一億人に増えたのです。そして私が卒寿（九十歳）を迎えた今年の人口は、実に、五十七億人です。まさに私の生涯の間だけで、四倍増したのです。

毎年九千万人ずつ増大しているので、今世紀末には、六十一億人を越えるのです。この勢いのままていくと、二〇二〇年には八〇億人、二〇五〇年には百億人を越えるでしょう。しかも増加分の九十五パーセントは、対応手段のとぼしい開発途上の国々で起こるのです。

厄介なのは、人口問題の延長線上に食糧問題という難題があることです。仮に、先進諸国の人々が、二十世紀と同じような考え方で消費し続けていった場合、エネルギー、食糧その他あらゆる資源が危機におちいります。一体だれが、どうやってこの増大する世界の人口を支えていくのでしょうか。私は、時を移さずこうした諸問題への対応策をみつけなければならぬし、またそれに成功しなければ、人類に将来はない、と考えるてきました。

そこで、私はこの総会の議題のひとつとして、「人口増と食糧供給を均衡させる」問題を選びました。これに先立ち、先月この問題に関する専門家に、ここ東京に集まって頂き、真摯な議論がなされました。私はフレーザー氏をはじめ、会合に参加された方々に感謝したいと思います。専門家会議の結論は、開発途上国、先進国、国際社会がそれぞれの責務を自覚して、ただちに最大限の努力を払わないかぎり、人口増加と食糧の安全保障の世界的な問題は、克服できないとしています。

この専門家会議は、きわめて有意義な提言をいくつか出しました。なかでも私にとりわけ注目している提言は、開発途上国に対しては、家族計画に不可欠な女性の社会的地位の改善です。また先進国に対しては、過剰な消費が地球人類問題の重要な部分なのだという意識を、国民に植えつけるべきだという点です。

また、不安定な為替相場が、今日多くの国の経済運営を困難にしています。この問題や無秩序な金融市場への対応策も、今回の会議では「グローバル化した金融市場の規制」という課題のもとで議論いたしたいと考えます。

さらに一国、あるいは一地域では解決不可能な地球規模の問題があらゆる分野で顕著になっております。こうした諸問題は、超国家的な視点をますます必要としております。リオデジャネイロの「国連環境開発会議」に世界諸国が集まって、二酸化炭素削減等の目標を定めたことは、まさに人類が超国家的な協力により共通の地球規模の問題を解決しようという意思の表れであります。かかる人類の期待にこたえて、国連はこのようなますます拡大する責任を担えるように変革できるのでしょうか。国際機関相互の連携はどのように進めるべきなのでしょう。この問題も、「国際機関の将来の役割」という課題のもとに、今回討議されます。

さて、新しい安全保障の概念は、私達全員の、意識と態度の変化を要求しているのです。ある意味でこれは当然、物質と精神の両面にわたる人類の文明観、或いは価値観といったものを、見直し、築き直すことに他ならない大命題です。そして、これこそが、十三年間続いたOBサミットが、一貫して追求してきたことの土台の部分でもあります。

私達のOBサミットは、ヘルムート・シュミット氏と私の他、二、三名で当時の世界情勢について話し合う中から誕生し、一九八三年に第一回ウィーン会議を開きました。戦後の世界を枠づけていた、あの二極体制の下で冷戦が頂点に達していた時期でした。いつ核戦争の脅威が現実になっても不思議ではないほど、米ソ両大国の対立と緊張が、高まっていたのです。また世界は、第二次石油危機から生じた不況にありました。当時、私達のOBサミットは、まだ広く認識されていなかった地球的諸問題が、人類にとって最大の脅威となることを、予感していたのです。

こうした重大問題と取り組むために、私達はOBサミットを設立したわけですが、東西南北、全世界の代表が一堂に会さない限り、世界の問題を総合的に分析できないことは、最初から明白でした。

設立総会で、私達が取り組むべき優先課題は「平和と安全保障」、「世界経済の活性化」、「人口・環境・開発問題」の三分野と決まりました。冷戦の最高潮の頃、イデオロギーや信条の異なる人々が、意外なほど簡単に合意したのです。すなわち、人類にとっての共通の問題を解決するための、努力や決意に国境はないということが、実証されたのです。

爾来、私達は発想の転換をあらゆる局面で訴えてきました。OBサミットの提言が常に時代を先取りし、国際社会の議論に多大に貢献してきたことは、世界的にも認められていると、私は自負しております。

さて、日本では、さきほど申し上げましたサリン事件の他、阪神大震災、急激な円高、不透明な景気回復の足どりなどを背景として、政治への不信を指摘する厳しい声が高まっております。ではありますが、それらが決して日本を、世界と全人類の未来へのかかわりあいから、免責するものではありません。



五〇年前に私達日本人のみんなが、廃墟の中でなめた苦しみを、いま世界で十数億人にも達するという、最貧困層の人々の苦痛と重ね合わせるとき、私達はただ現状に感謝し、満足しているだけでは済まされないので。そして、私達自身のあるりようを検証しつつ、困窮している人々の生活を、少しでも改善できる展望が持てるよう、最大限の協力を行わねばならないのです。そして私達の子孫が、安全な将来の展望を持てるよう努力しなければならないのです。

申すまでもなく、これは困難きわまる事業であります。しかし、こうした貢献をすることこそが、OBサミットを設けた主旨なのです。皆様共に、努力しようではありませんか。

ご静聴ありがとうございました。